



# 紀平真理子のオランダ通信

第25回

## オランダの園芸培土

### プロフィール

1985年、愛知県名古屋市生まれ。南山大学外国語学部スペインラテンアメリカ学科卒業後、コンタクトレンズメーカーで国内・海外業務に携わる。夫の駐在帯同で2011年12月からオランダのアムステルダム市に在住。父の家庭菜園を見て農業に興味を持っていたこともあり、すべてにおいて実利的で交渉上手なオランダ人によるオランダ式農業に魅了されたという。

養液栽培の園芸培土としてオランダ園芸では主にロックウールやココピート、ピートモスなどが使用されている。

ロックウールは玄武岩を1600℃で溶解し、遠心分離により繊維状に固めたもので、無機培土のため、水や肥料の管理がしやすい。

一方、ココピートはスリランカやインドで栽培されたココヤシのハスクと呼ばれる中果皮を粉碎した粒を利用して加工される有機培土だ。ハスクは塩類濃度（EC値）が高いため、使用前の水洗いが不可欠である。その後天日干しで乾燥圧縮する。水分含量が20%以上の状態で圧縮すると、農場で注水したときの復元性が悪くなるため、乾燥は品質を左右する重要な工程だ。

ちなみに、ロックウールはpH7.0前後で調整を行なうが、ココピートも6.5の弱酸性で安定しているため、4.0〜5.0の間で変動するピートモスと比較して管理がしやすい。

現在、世界規模で見るとロックウールとココピートの使用比率はほぼ同等であるものの、オランダではココピートの使用は3%にとどまる。その理由の一つとして、オランダではRockwool社など国内大手メーカーが力を入れて販売を行なっている。

ることが挙げられる。また、1980年ごろからロックウール栽培が普及したことにより、ロックウールをベースとした研究が行なわれてきたためもある。

さらに、リサイクルシステムが構築されていることも、オランダでロックウールが主流となっている理由だろう。通常、使用済みのロックウールは産業廃棄物になる。ところが、オランダでは業者が回収し、プラスチックとロックウール部分を分離した後に土を混ぜ、建材用のレンガや再びロックウールとして利用するために加工する。

一方、有機由来のココピートには微生物が含まれているため、2〜3年かけて分解し、土に還る環境にやさしい培地といえる。もともと再利用可能な培土ではあるが、ココピートで世界トップシェアを占めるオランダvan der Knaap社は、国によっては契約次第で使用済みココピートを回収し、園芸培土として再利用するサービスマも始めている。

ココピートはメーカーによって品質差が大きい。そのため、選択の際に価格のみに左右されず、「復元性」「EC値」「同質量での重量差」など品質を見極めて選ぶことが重要になる。

品質が高いものは病気をコント

ロールすれば2〜3年使用可能だといわれている。ただ、オランダでは経営面積が広く、病気のリスクを避けるため、毎年取り替える果菜類生産者が多いのも現状だ。



van der Knaap社製品の一部（詳しくは次号で）



GRODAN社のロックウール培土を使用したパプリカ栽培